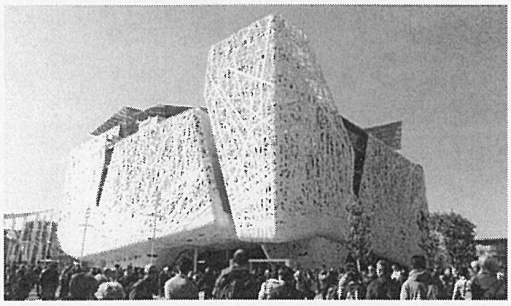
主要パビリオン・施設

1. 開催国館（イタリア館）

万博会場を南北に延びる大通り「カルド」の北端に位置する「パラッツォ・イタリア（Palazzo Italia）」と、カルド沿いに並んだイタリア各州や特産物をテーマとするパビリオン群を総称してイタリア館（Italian Pavilion）と呼んだ。

パラッツォ・イタリア

万博会場内のパビリオンで最大面積を誇った「パラッツォ・イタリア」は、隣接する「生命の樹」とともにミラノ万博のシンボルとして親しまれた。「イタリアの苗床（Nursery Garden of Italy）」をテーマに、イタリア各地の美しい風景を全面鏡張りの壁面に投射したゾーンや、食に対する新しい取組を紹介したゾーンなど多彩な展示が展開されたほか、ミラノ憲章（資料編p53参照）のコーナーが設けられVIPを含む多くの来館者が署名した。



自治体等出展エリア

カルド沿いには、ロンバルディア州をはじめとする地方自治体のほか、コーヒーや乳製品などのイタリア企業によるパビリオンが並んだ。「ワイン・パビリオン」ではイタリア全土から集められた1,000を超す種類のワインが展示され、ソムリエの案内によるテイスティング（有料）が人気を集めた。

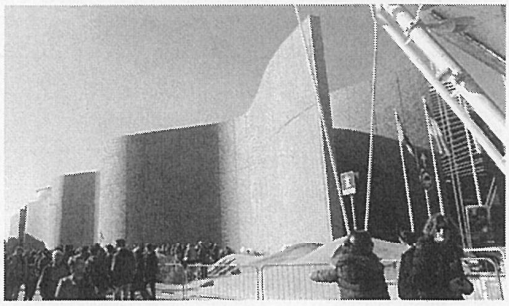
2. 外国館

万博会場を東西約1.5キロメートルに貫く大通り「デクマーノ」沿いに、各国の趣向を凝らした52の自己建築型パビリオンが並んだ。各パビリオンには展示のほかレストランやショップ、イベントスペースなども設けられ、独自のテーマに基づき、食に関する各国の伝統・文化や様々な取組が紹介された。

※BIE褒賞において2,000平方メートル超の自己建築型パビリオンのカテゴリーで金賞を受賞した日本館以外の2館（ドイツ、フランス）および直近の万博開催国の4館（UAE、カザフスタン、韓国、中国）を五十音順で掲載。

アラブ首長国連邦（UAE）館

パビリオン全体が砂漠・砂丘をイメージして作られており、壁の材料にも砂が使用された。視界最大170度のスクリーンからなるメインショーでは、現代から過去にタイムスリップした少女が砂漠での生活の過酷さを知り、水や食料の大切さを学んでいくストーリーが上映された。パビリオン内には2020年ドバイ万博を紹介する展示も設置された。

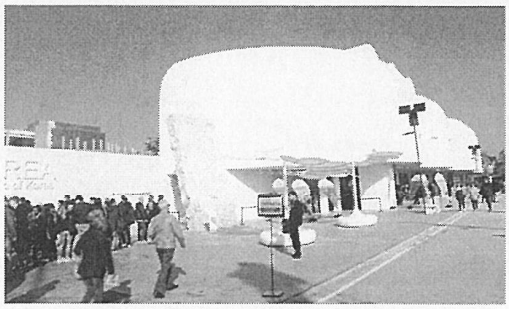


カザフスタン館

2017年アスタナ万博の開催国であるカザフスタン館では、同国の過去から未来を辿る旅をテーマに、砂絵のアートの実演のほか、世界の食料安全保障への貢献策を紹介したマルチメディア展示、3Dシアターのメインショーなどが展開された。パビリオン正面のステージでは連日伝統音楽などのパフォーマンスが披露された。

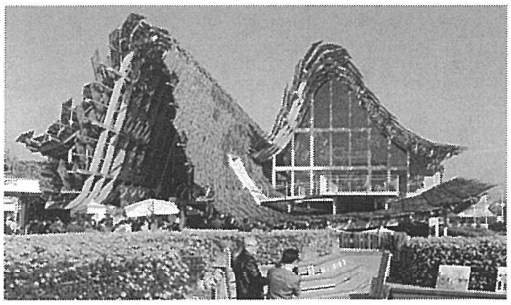
韓国館

伝統的な発酵食品や野菜を中心とする「韓食（Hansik）」を取り上げ、食が私たちの身体を形作るだけでなく、アイデンティティーを表し得るものであることを示した。パビリオン全体が韓国伝統の陶器をイメージしており、2階には展示スペースが、1階にはレストランやショップが設置された。



中国館

「希望の地、命のための食(Land of Hope, Food for Life)」をテーマに、中国の農耕文明、農業における技術革新、食文化を紹介。敷地面積は外国館中2番目で、パビリオンには中国の伝統的な建築構造が用いられ、独特の外観を持つ屋根が波打つトウモロコシ畑を表現した。

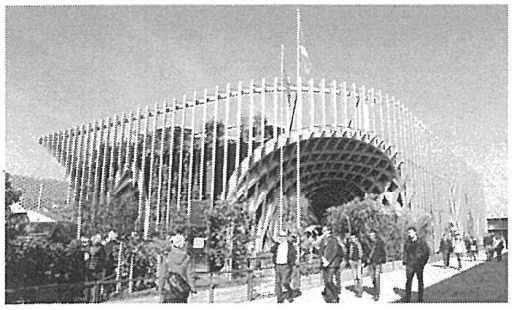


ドイツ館

外国館の中で最大の敷地面積で出展したドイツ館では、「アイデアの畑(Fields of Ideas)」をテーマに、水や土壌、気候、生物多様性に焦点を当てた展示を展開。来館者にはシードボード(Seed Board)と呼ばれるセンサー機能付きのボール紙が配られ、水の浄化や農業のサイクル、野菜の品種改良などテーマ別の解説映像をボール紙に映して観覧することができた。

フランス館

世界の食料生産への貢献、新たなモデルの発展、途上国の自給自足の改善、健康・栄養・料理における質と量の調和の4点をコンセプトに、フランスにおける農業や食の取組を展示。パビリオンへ通じる屋外通路では、フランス各地の野菜や果物が植えられた。

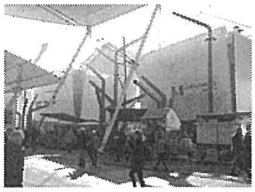


3. クラスター

共通するテーマのもと、独立パビリオンを持たない複数の国や機関、企業などが共同出展するためのスペース。「コメ」、「カカオ」、「コーヒー」など農産物をテーマとするグループと、「地中海」、「島・海」、「乾燥地帯」など地域の特徴に焦点を当てたグループとがあった。農産物などの分類による参加モデルは万博としては初めての試みで、各テーマに応じ、参加国が農業や食に関する独自の文化や歴史を紹介した。

コメ～豊穣と安心～
Rice – Abundance and Security

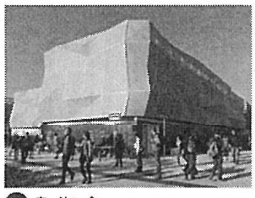
穀物とイモ類
～旧来の作物と新しい作物～
Cereals and Tubers : Old and New Crops



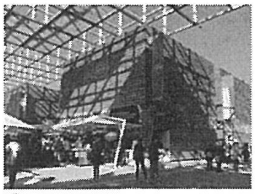
カカオとチョコレート
～神の食料～
Cocoa and Chocolate : The Food of Gods

地中海の食～健康・美しさ・調和～
Bio-Mediterraneum :
Health, Beauty and Harmony

コーヒー ～アイデアの原動力～
Coffee : The Engine of Ideas



島・海・食
Islands, Sea and Food



果実と豆類
Fruits and Legumes

乾燥地帯における農業と栄養
Agriculture and Nutrition
in the Arid Zones

スパイス～スパイスの世界～
Spices : The World of Spices

4．テーマエリア

パビリオン・ゼロ

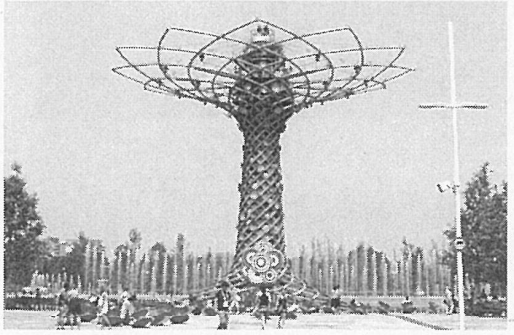
メインゲート正面に立つミラノ万博のテーマ館。巨大な映像や模型による展示で人類の食をめぐる歴史を表現し、来場者がミラノ万博のテーマ「地球に食料を、生命にエネルギーを」を考える導入部となっている。

入口を入ると、天井まで壁一面に木製の引き出しが並べられた「世界の記憶」と呼ばれる巨大な書斎棚がそびえ立ち、棚を通り抜けると裏側が一つの巨大なスクリーンとなっている仕掛けが来館者の注目を集めた。人類の食料生産・消費の歴史を辿りながらゾーンは続き、農業・漁業の技術のほか、食料保存の知恵、生物多様性、農村風景から都市への変化、現代における食品廃棄（フードロス）などの問題が印象的な展示とともに分かりやすく紹介された。

また最後のゾーンでは、一般募集により選定された、世界各地の食料安全保障に関する持続的開発に向けた取組の優良事例（ベストプラクティス）が展示された。

レイクアリーナ、生命の樹

カルドの北端、イタリア館横に位置する屋外スペース。直径90mの円形の噴水を囲むように3,000人が着席可能なステップが設置されており、来場者の憩いの場として活用された。レイクアリーナには、ミケランジェロ設計によるローマのカンピドリオ広場から着想を得てデザインされた、高さ37mの「生命の樹（Tree of Life）」がそびえ立ち、連日迫力ある噴水と光の演出によるショーが行われた。

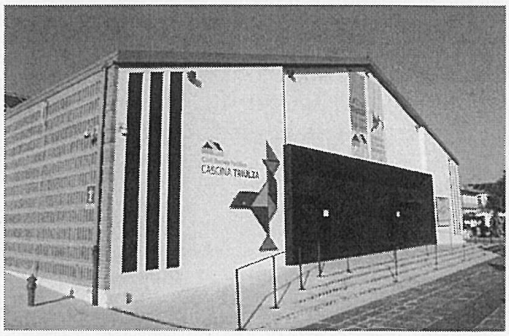


地中海の丘

デクマーノの東端に位置する高台で、地中海の生態系を代表する植物で覆われており、頂上からは万博会場を見晴らすことができる。隣にはスローフード運動の展示スペースが設置された。

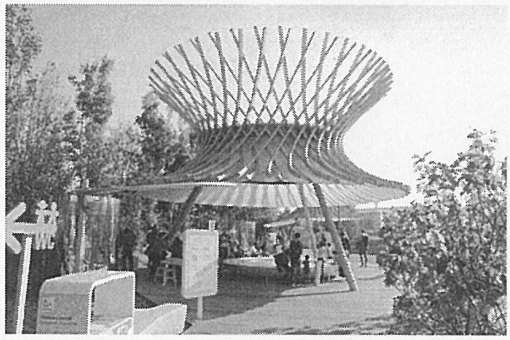
カッシーナ・トリウルツァ ～市民社会団体パビリオン～

ロンバルディアの伝統的な農場の建物で、「市民社会団体パビリオン」として使用された。万博閉幕後も、会場のランドマークとしての活用が予定されている。



子どもパーク

8つのアトラクションを通して、人間と生き物（動物、植物）との結びつき、水やエネルギーの大切さ、持続可能性などを学べる子どものためのスペース。



生物多様性パーク

食や農業における生物多様性をテーマとしたエリア。屋外公園とガーデン、展示、オーディトリアム、有機農業パビリオン、ウェブ・ソーシャルネットワークの5つのセクションからなり、生物多様性に関する問題やその解決のための技術などを紹介した。

5．イベントエリア

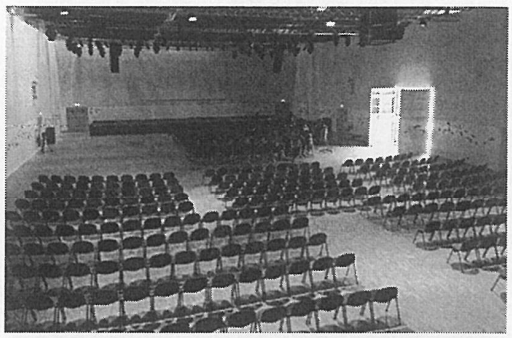
オープン・エア・シアター

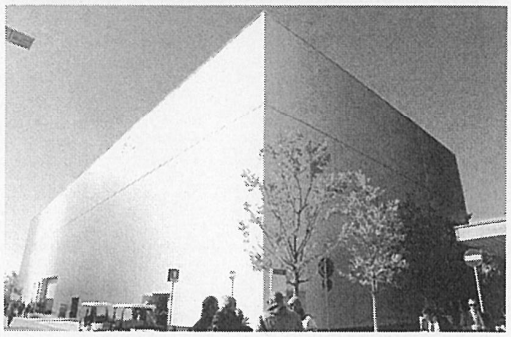
カルドの南端に位置する、最大1万2,000人収容（4,000席と8,000人分の立ち見スペース）の屋外シアター。開幕式や閉幕式などの大規模な催事会場として使用されたほか、5月から8月まではシルク・ドゥ・ソレイユによる「アッラヴィータ！（ALLAVITA!）」が上演された。

オーディトリアム／カンファレンスセンター

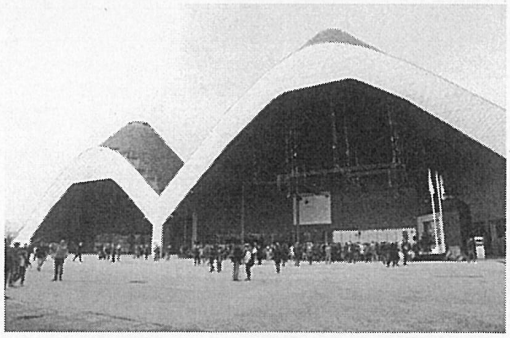
オーディトリアムは、万博会場中央南に位置する多目的施設で、参加国によるナショナルデー催事等で使用された。収容人数約1,000人（ステージ設置サイズによる）の大規模催事のための施設で、大型のコンサートやコンベンション等が開催された。

大部屋（収容人数：約260人）2室、中部屋（収容人数：約70人）3室からなるカンファレンスセンターでは、講演やワークショップ等の中小規模催事が開催された。





エキスポ・センター

デクマーノの西端に位置する屋内施設で、多目的の会議スペース等が設置された。建物の正面が半屋外のホールとなっており、各国ナショナルデーの公式式典等が行われた。

また、国内外メディアのための「メディアセンター」が設置され、登録したメディアには万博公社や各パビリオンからの最新情報や、各種通信設備などのサービスが提供された。このほかイタリア放送協会（RAI）のスタジオも設置された。